

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
346	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Alcohol abuse and pulmonary disease. アルコール中毒と肺疾患	
<b>執筆者</b>	
Boe DM, Vandivier RW, Burnham EL, Moss M.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
J Leukoc Biol. 2009 Nov;86(5):1097-104. Epub 2009 Jul 14. Review.	
<b>キーワード</b>	
アルコール中毒、肺疾患	
<b>要 旨</b>	
<p>ARDS は肺泡毛細血管膜の透過性の増加、びまん性肺胞障害、蛋白質含有の間質性と実質性浮腫、ヒアリン膜の存在といったものを特徴とした重症の肺障害の型である。これらの病理学的変化は重症の低酸素症、肺の死腔の増加、肺コンプライアンスの減少といった生理学的変化も伴う。米国では毎年約 200,000 人がARDSを発症し、その約 50% がアルコール乱用の既往を持つ。著者はARDS進行の独立した危険因子としてアルコール乱用を同定し、最近の研究で肺切除術と輸血を受けた患者でこれらについて評価した。ARDS生存者では、アルコール乱用はまた機械換気期間の延長と ICU 滞在期間の延長と関連している。ARDS 患者における結果の改善に向けた研究にもかかわらず、死亡率は 40%以上と高い。アルコール乱用者では、死亡率はさらに 65% と高い。このレビューで、アルコール乱用と ARDS との関連、肺機能に及ぼすアルコール乱用の影響、アルコール乱用の結果としてのARDS リスクのある患者に対する方向性と潜在的な治療ターゲットについて討論する。そのような患者では、免疫機能が低下し、肺の抗酸化容量が減少し、肺胞上皮細胞の機能が低下し、レニン・アンジオテンシン系の活性化が変化し、GM-CSF 伝達機構を害する。これらの機序はアルコール乱用の結果としてのARDS リスクのある患者に対する潜在的な治療ターゲットを表している。</p>	